

2023年6月25日 聖霊降臨節 第5主日礼拝メッセージ

「彼女の涙」

岡嶋千宙伝道師

聖書 創世記 21章 14-21節

先日、インターネットで調べものをしていて、ある記事が目にとまりました。その中で紹介されていた一つのエピソード。こんな内容でした。

ある日、ある場所で交通事故が起きました。車を運転していた父親は即死で、助手席に乗っていた男の子は頭を強打。意識不明の重体で病院に運ばれ、担当医の判断で、即座に脳切開手術をすることになりました。幸い、その病院には世界的にも著名な脳外科医がいて、その医者が執刀することになりました。ところが、手術室で患者を見たその医者はこう言いました。「・・・私には手術することができない。この子は私の息子」

この物語にしても、他のものにしても、アニメやドラマ、または映画に出てくるシーンで、「あれ？」と思うこと、ありませんか？ おかしいな、なんかしっくりこない、と、つまずいてしまう。わたしは結構あって、大抵は、一瞬「ん？」と思って止まるだけで、あとはスルーして、結局なんだったけ？ と忘れてしまいます。けれど、つまずきが気になって先に進めないということもあります。早く結末を知りたいからさっと飛ばしてしまいたいのですが、どうしても気になってしまう。つまずく理由を探りたいと思う。先程紹介したインターネットの記事もそうです。皆さんはどうでしょう。わたしがなぜつまずいたのか、それは、後で説明したいと思いますが、聖書はどうかというと、つまずきだらけです。むしろ、つまずきしかないと言いたいくらい。わたしが初めて聖書を読んだのは今から 25 年以上も前、大学の必修科目で聖書を読まないといけないくて、どうせ読むなら最初からということで、一ページ目、創世記の 1 章から読んでみました。ですが、すぐにつまずきました。当時はキリスト教のことをほとんど知らず、さすがにクリスマスのことはわかっていましたが、イースターがキリスト教と関わる祝日だということを知らなかったくらいです。のっけから訳がわからない。先に進みたいという気持ちが起こらず、かといってつまずいた理由を探ろうとも思えずに、それから長い間、聖書を開くことはありませんでした。本日の箇所も、つまずきが多くて、大きい箇所。以前から気になってはいましたが、メッセージをするにあたって改めて読んでみたら、やっぱりつまずきました。今日は、このつまずきに留まってみます。つまずきを無理に回避するのではなく、向き合って、別の角度から眺めてみる。そして、つまずくからこそ、気づくことのできる神様のメッセージを皆さんと共に味わってみたいと思います。

登場人物は 3 人。アブラハム、ハガル、そしてここでは名前が記されていませんが、その二人の間に生まれた子ども、イシュマエル。あと、人ではないのですが、ハガルに話しかけた「神の使い」も登場します。天使のような存在。それと、忘れてはならない神様。ということで、登場するのは、3 名と 1 天使と神様。聖書に親しんでいる人なら、これだけで、登場する存在たちの関係はわかるかと思いますが、簡単におさらいしておきます。まずはアブラハム。この人、男性ですが、キリスト教におい

てとっても重要な人物です。彼は、救い主とされるイエスのずっと昔のご先祖様で、キリスト教の神様を信じた最初の信仰者とされています。そのアブラハムの妻でもあり、召し使い、聖書では「奴隷」とされているのが、二人目の登場人物ハガルです。実はアブラハムには、ハガルの他にも妻がいて、そちらの女性、サラが正式な妻です。ハガルは、もともとエジプト出身で、その地からアブラハム一家に召し使い・奴隷として連れてこられたのでした。アブラハムと正式な妻サラの間に子どもが生まれなかったことから、サラの代わりに跡取りとなる子どもを産むということで、ハガルが召し使いの身分はそのままにアブラハムの妻となった。そんな関係です。ハガルにはアブラハムとの間に子ども、イシュマエルが生まれ、さらにイシュマエルが青年になったとき、サラにも子どもが生まれました。こちらはイサクという名前。アブラハムからしてみれば両方の妻に子どもが生まれ、跡取りが二人もできたということで良いこと尽くしです。ですが、正式な妻であるサラはこの状況を喜ばませんでした。今日の箇所少し前 9-10 節「サラは・・・(ハガルの子イシュマエル)が遊び戯れているのを見て、アブラハムに言った。『この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子が、私の子、イサクと並んで跡を継ぐことはなりません』」ものすごい憎しみです。サラがなぜ二人を嫌ったのか、詳しい理由はわからないけれど、相当な嫌悪感です。夫アブラハムですらその気持ちを静めることができず、結局、サラの願いは叶えられます。アブラハムは、ハガルとその子どもイシュマエルを一家から追い出したのです。追い出されたハガルとイシュマエル。荒れ野をさまよううちに、食料も飲み物も尽きてしまいました。絶望の中でただ死を待つしかない。そのとき、天からの神の使いが現れ、二人を救い出す。これが本日の御言葉に描かれた場面です。

もう少し丁寧に、本日の箇所をたどってみます。家を追い出され、荒れ野をさまよい、食料・飲み物も尽き、死を待つしかなかったハガルとイシュマエル。この箇所で、イシュマエルが「子ども」とされていますが、聖書の記述に基づけば、このときイシュマエルは 20 歳を越えた青年でした。大人です。気力も体力も十分に備わっている大人の男性が、母親の言葉に素直に従って木の下に座り、死ぬのをじっと待っているとは思えません。反抗心が芽生え、様々にもがいて何とか死なない道を探ろうとしていたと考える方がしっくりきます。それにも関わらず、木の下で、母が見守るなかでじっとしていたというのは、何か特別な事情があったからだと推測されます。ある解釈によれば、このときイシュマエルは重い病気にかかっていたとされています。水がなくなったのも、イシュマエルの病気のせいだったのでしょう。病人だから普段以上に水が必要なのだけれど、持っていた水がすぐになくなり、近くに水場もない。イシュマエルもハガルも、乾き、苦しんでいました。ハガルにしてみれば、自分が苦しいだけではなく、自分の胎から出てきた子どもが瀕死の状態にあるのをただ見ているしかありません。自分も息子も救うことができない。二重の無力感。自分の、息子の死の恐怖に襲われながら、ハガルは涙を流しました。16 節。ハガルは「声を上げて泣いた」。より正確には、「彼女の声を上げて涙を流した」

問題は次の節。ここがつまずきの箇所です。16節で涙を流したのはハガルでした。ですが、次の17節。神は「子どもの泣き声を聞かれ・・・、神の使いが・・・言った。『神は・・・子どもの泣き声を聞かれた』」子どもの泣き声です。ハガルの涙、泣き声が、イシュマエルのものに置き換えられています。ハガルの涙、泣き声はどこにいったのでしょうか。ハガルと共にイシュマエルも泣いていたと考えられなくもありません。神は、その涙を見て、イシュマエルの泣き声を、ハガルの泣き声とともに聞いたのだ、と。ですが、先に見た通り、イシュマエルが重い病を負い、死の一步手前というほどに弱っていたのだとすれば、おそらく、彼は涙を流すことも、まして、声を上げることすらできなかつたはずで、この場面に響いていたのはハガルの声、流れていたのはハガルの涙だけでした。さらに、18節。神はハガルとイシュマエルを救い出し、祝福の約束を語ります。「私は彼を大いなる国民とする」。そして、神によって救い出され、死の危機から抜け出した二人のその後の歩みを記す20節。「神は子どもと共におられ、その子は大きくなって、荒野に住」んだ。焦点が当てられるのはイシュマエルです。ハガルの存在はどこかに行ってしまっています。はじめのうちこそ、神の使いに名前呼び掛けられたハガルでしたが、物語が進むにつれ、名前を持った、一人の人格としての存在ではなくなっています。イシュマエルの母という、その役割においてのみ登場することが許されているような印象を受けるのです。それは17節のイシュマエルの「泣き声」という訳語にも現れています。ここは、原文に忠実に訳せば、単なる「声」で、「泣く」あるいは「涙」という意味はありません。聖書協会共同訳において、「泣き声」と訳されている他の箇所には、別にしっかりと「泣く」「涙を流す」という意味の単語が付されているのです。さらに、16節の「声を上げて泣いた」という表現。最後の「泣いた」と訳される単語が用いられるのは、創世記の他の箇所では男性のみです。しかも、そのほとんどが、アブラハムのもう一人の子どもであるイサクから続く子孫のみ。だからでしょうか。他の訳(七十人訳)では、ここで泣いたのは、ハガルではなく、その子どもイシュマエルだとされています。はじめからハガルではなく、イシュマエルの泣き声、涙だったと理解できるような聖書の言葉使い。そして、実際にその方向で解釈しようとする試み。ハガルが、イシュマエルの母という役割の中だけで理解され、彼女個人の涙、声、存在がなきものにされてしまう。

ハガルは、エジプトから連れられてきた「女奴隷」でした。アブラハムとの間に子どもを産んだとはいえ、アブラハムから派生する神の救いの歴史の中で、彼女は、よそ者、部外者です。アブラハムの子孫として神の救いと祝福が約束されるのは、ハガルの子ではなく、サラの子イサクを通してです。アブラハムを初めとする物語の主流に属する人たち、正統な血の繋がりを有する人たちからすれば、ハガルもイシュマエルも単なる脇役でしかないのでしょうか。利用できる場所は利用する。でも、用がなくなれば切り捨てる。そんな存在であるかのように描かれるハガルとイシュマエル。しかもハガルは女性であり、エジプトという異国から連れられてきた「奴隷」。部外者の中でもさらに外にいる存在。ハガルを、彼女の涙、声を、放って

おいて良いのでしょうか。表面上の記述から、あるいはその後の解釈の方向から見てくるだけの姿に、ハガルを押し込めておいて良いのでしょうか。神の祝福を受ける民族の先祖アブラハムの子どもを産んだ女性、ただその役割だけで、あとは存在なき女性とされたハガルを、そのままにして良いのでしょうか。残念ながら、創世記にも、旧約の他の書物にも、ハガルが再び登場することはありません。まして、その存在が、アブラハムとの間に子どもを産んだ母ということ以上に、回復されることもありません。ですが、ハガル自身ではないけれど、彼女と同じような境遇にある女性たち、社会において、存在すら忘れられていた女性たちに目を向け、その声を聴き、思いに身を寄せ、涙を掬いとった人がいました。聖書の中では「新約」として分類される書物に証しされているその人、イエス。一人の名もなき女性、ハガルのように、救い主に通じる家系の人物と関わりがあるわけではないその女性が行うことを、イエスは否定しませんでした。周囲の人たちがこぞって非難の声をあげるなかで、ただ一人イエスだけが、彼女の心と行動を受け止め、彼女の存在を大切にしましたのです。そして、名前も知られない彼女のことを、「決して忘れない、忘れられることはない」とイエスは語ったのでした (Mt26:6-13, Mk14:3-9)。

冒頭のインターネットの記事、覚えているでしょうか。意識不明の重体で運ばれた男の子を前にして「手術できない」と語った脳外科医。その人は誰だったのでしょう。「脳外科医」という言葉からすると、男性だったのだろうと想像したくなります。すると、その男の子の父親は事故で死んでいるので、脳外科医が「わたしの息子」というのは、父親が二人になりおかしい、と思ってしまう。ですが、表面上の言葉の印象から思い浮かべることを横において考えてみます。脳外科医は女性であっても良いではありませんか。「わたしの息子だから手術できない」と語ったその医師は、その子にとっての母親であっておかしくありません。あるいは、脳外科医が男性であっても良いはずです。事故で亡くなった父親と同じく、脳外科医も男の子にとっての親、父親だった。男の子は同性カップルが育てていた子どもだったのかもしれない。そうであっても全くおかしくありません。聖書の言葉にしても、他の言葉や表現にしても、表面上のものから受ける印象だけでは見えない事実があります。見逃してしまう声があります。この場合はこうだからという印象が、偏見を生み出しているのかもしれない。一般的にはこうだからという思い込みが、一人ひとりの声を聞きにくくしているのかもしれない。涙を流し、声を上げ泣いている人の存在を無きものになっているのかもしれない。確実にあります。わたしにも。あなたにも。名もない女性の存在に目を向け、その人と交わり、「あなたのことを決して忘れない。あなたのことが忘れられることは決してない」と語ったイエス。その姿に倣い、わたしたちもまた、覚え続けていく必要があるでしょう。一人一人の涙。声。思い。存在。無きものにしない。この時この場で目にすること、耳にすること、触れること、感じること。その背後にある一つ一つの心の動き、痛みや悲しみ、苦しみ、あるいは喜び。忘れられそうになっている一人ひとりの存在に目を向けていく。今日、今、この場所から。イエスと共に。信仰の仲間である皆さまと共に。